

北方謙三

降魔の剣ごうま



新潮社

北方謙三

降魔の剣

新潮社



ごうま
降魔の剣 けん

著者 きたかたけんぞう
北方謙三

発行 一九九七年一月二〇日

発行者 佐藤隆信

発行所 郵便番号一六二
東京都新宿区矢来町七一番地

株式会社 新潮社

電話 編集部〇三(三二六六)五四一一
読者係〇三(三二六六)五一一一
振替 〇〇一四〇
五八〇八

印刷 大日本印刷株式会社 製本 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

降魔の剣*目次

第一章

白日はくじつ

7

第二章

かたち

51

第三章

茸きのこ

91

第四章

鱗ひび

130

第五章
淵

171

第六章
鬼

211

第七章
兩
斷

251

装画 * 百鬼丸
装幀 * 新潮社装幀室

降魔の剣

第一章 白日

1

若い男だった。

野袴に筒袖で、大刀は佩いていない。総髪を後ろで束ねているが、その髪もかなり汚れていた。茶色で、艶がないのだ。

そんなことより、保田新兵衛の眼を惹いたのは、男が両肩に担いでいる二つの米俵だった。風体を見たのは、習性のようなものだ。

米二俵を担いでいるというのに、男の足になんの乱れもなかった。腰を落として踏張るという感じもなく、実に軽々と歩いている。米に見えるが、干物などの軽いものを詰めた俵物かもしれない。

擦れ違う人間も、それほど重いものだとは思っていないらしく、驚いた表情はしていない。米二俵を軽々と担いで歩ける男など、いるわけがないと誰もが思う。

しかし新兵衛は、男の肩が俵に食いこんでいるのを見逃さなかった。

声をかけようとして近づいた時、男の足が異常と言っていいほど速いことに気づいた。

「待て」

男は歩き続けている。

「聞えんのか。待てと言ってるんだ」

男が足を止め、俵ごと上体を新兵衛の方にむけた。

「御用の筋だ。白昼に米俵を担いで歩いてはならないが、どこの米だということぐらいは教えて貰おうか」

「米ではありません」

「なに？」

「江戸に入る時も番所で訊かれましたが、これは土です」

「俺をからかっているのか、おい」

土なら、米と較べものにならないほど重たい。

「ほんとうに、土です。私は向島で焼物を焼いている、日向景一郎と言います。この土は、山に二十日ほど籠って選り抜いたもので、ほかの土と混ぜて焼物にします」

「降ろしてみろ」

日向と名乗った男は、軽々と二つの俵を降ろした。そのひとつを、新兵衛は持ちあげようとした。膝まで持ち上げられるかどうか、という重さだ。刀の柄が邪魔をしたふりをして、新兵衛はすぐに俵を降ろした。

「しかし、大八車などを使えばよいではないか」

「別に、担ぐことを苦痛とは思いません。三つ以上の俵がある時は、大八車を使います」

「わかったが、向島のどこで焼物をやっている？」

「薬種屋、杉屋清六さんの寮の中に、窯はあります」

「杉屋」

「向島の寮は薬草園も兼ねていて、手が空いている時は、そちらも手伝います」

怪しいところは、なさそうだった。力があるというだけの理由で、引っ張るわけにもいかない。新兵衛は、行けと顎をしゃくった。日向は、軽々と二つ同時に俵を肩に載せた。

「お角力だつて、そうはいかねえやな」

「はじめは、小さいものを運んでいました。馴れてしまふのですね。山の中から、五日かけようと六日かけようと、大変だとは思わなくなりました」

目礼して、日向は歩きはじめた。

馬鹿力を相手にしてはいられない、と見送りながら新兵衛は思った。圧倒されるような気分を、そう思うことで押しのけようともしていた。

品川に逃げているに違いない、ともともとの目的を思い出した。浅草での刃傷沙汰の下手人である。みんなその一帯を探していた。新兵衛が品川に眼をつけたのは、傷を受けた者たちの話からひらめくものがあつたからだ。もつとも、人に主張できるようなものではなかった。庖丁を振り回した手が、肩から上にあがつていない。実際、三人の男のうち、顔を斬られた者はなく、ひ

とりは下腹を刺され、あとの二人は腿を斬られていた。

高輪たかまどに入った。ひとりで来たことを、いくらか後悔していた。手札を渡してある目明しは何人かいる。せめて、ひとりとは伴った方がよかったかもしれない。刃物を持った下手人を手捕りにしたことなど、一度もないのだ。寄ってたかってからめ捕る、ということしかしてこなかった。そんな時は、目明しや手先が遣う鉤繩かぎづなの方が、十手や刀よりずっと役に立つ。

臨時廻りの同心になって、四年。その前は牢屋見廻りで、牢屋敷に出張し、罪人の仕置など見廻った。囚獄いどくに石出帶刀いせでさき以下の同心がいたので、死罪、入墨などを自ら扱うことはなかったが、眼を覆いたくなるようなものはしばしば見た。

右手が肩までしかあがらない男のことも、牢屋見廻りで知ったのである。肩の筋のどこかを斬られたとかで、右手が頭に届かなかった。ひと月ほど牢にいて、敲たたきの刑で出ていったはずだ。

品川の漁師だった。

考えながら歩いているうちに、品川に着いた。

当たりをつけたからには、やってみるしかなかった。男は三次さんじと言ひ、老父を抱えていた。捜す気になれば、難しくない。

品川の番所に寄ることも考えたが、ここまでひとりで来たのだ。手柄をよそに持っていかれたくはなかった。

品川りやうしやう獅師町の三次の長屋は、すぐに見つかった。戸に近づくと、中から男の低い話声が聞えた。二人で、ひとりの声は老人のものだった。

新兵衛は、黙って戸を引き開けた。

土間の上がりかまちのところに、男がひとり腰を降ろしていた。居間の老人は、かしこまって座っている。潮しほ灼やけた顔は、漁師の証のようなものだった。

「三次はいねえのかい？」

老人が答えようとするのを、もうひとりの男が制した。立ちあがり、慇懃いんぎんなお辞儀をする。商人態ていだが、番頭や手代には見えなかった。それに、身のこなしに隙がない。

「湯島天神下の薬種屋で、杉屋清六と申します。三次が、なにかいたしましたか？」

「ちよつとばかり、訊きたいことがあつてな。どこへ行つてる？」

「漁師ですから、海の上でございますよ」

杉屋清六の名は、ついさっきも聞いた。日向景一郎とかいう男は、杉屋の寮で焼物を焼いていると言ったのだ。

「待たせて貰うぜ」

「朝まづめの漁で出かけているのですよ。明日の午ひるにならなければ、帰らないそうです」

「杉屋、おまえさんと喋りに来たんじゃないんだがな。そのとつとつあんから、話を聞きてえんだよ」

「三次は、いねえです」

老人が、新兵衛の方へ眼をむけた。

「漁を終えたら、野郎は大抵どこかで寝てまさあ。それから女郎買いで、時によっちゃ賭場に出

入りすることもあるみてえです」

「滅多に、ここにも戻ってこねえってことだな、とつつあん？」

「俺も、細々とだが漁をやってましてね。別に野郎が戻らなくなつたって、困りやしねえんでさ」

「戻らねえとも言えねえんだらう？」

「そりゃまあ、海が荒れた時なんざ、不貞寝^{ふてね}をしてまさあ」

新兵衛は、杉屋が腰を降ろしていた場所に同じように腰を降ろした。そうすると、老人の方がさくらか目線が高くなる。

「五年前、三次はいくつ敵かれたんだっけな？」

「五十、でさ」

「追放にならなかつただけ、ましか。古着屋の手代と揉めて、半殺しにしたにしちゃ、五十は軽^さ」

「お言葉ですが、むこうが悪いんですぜ。まがい物を売りやがったんだから」

「詳しいことは、忘れたよ」

杉屋は、所在なさそうに立っている。老人は、新兵衛から眼をそらそうとしなかった。

「まあ、いねえんなら、仕方ねえやな」

「お役人様」

杉屋が、なにかを懐紙に包んで、素速く新兵衛の手に押しこんできた。一分銀だと、紙を通して触れただけでわかった。

「三次が戻ったら、北の奉行所から同心が訪ねてきた、と伝えておけ。それで、いくらかは大人しくなるだろう」

新兵衛は腰をあげた。

長屋を出ると、弁財天の方へ歩いた。獵師町は細長い洲のようなところであり、突端の弁財天の手前にも橋が一本架かっている。そこから、宿場の方へ渡った。

杉屋が、宿場に姿を現わしたのは、半刻ほど経ってからだった。船着場の方へ歩いていく。沖には五百石船が二艘いて、舳で荷を運んでいた。その舳の一艘を、杉屋は待っているようだった。やがて舳が近づいてきた。荷のほか、男が三人乗っていた。その中のひとりが、杉屋と喋りはじめた。杉屋が舳に乗り移り、荷のひとつを開いて中身を確認していた。

それで終りだった。杉屋は舳から降りると、なにもなかったように歩きはじめた。

気取られないようにかなりの距離を置いて尾行したが、湯島の店に戻るまで、誰とも話を交わさなかった。

杉屋の店構えは、大きなものだった。五十両以上はかかったと思える金文字の建看板が出ていて、金竜丸と書いてある。その薬の名は、新兵衛も知っていた。

翌日、新兵衛は杉屋の店先を覗いた。金竜丸だけでなく、珍根丹とか雲天膏とか胆快丸など、新兵衛が知っている薬が少なくなかった。

「これはお役人様。なにか薬が御入用でございますか？」

杉屋が出てきた。店先では手代や丁稚が客の応対をしていた。奥では、男が二人、薬研で薬を

粉にしている。廻り同心に覗きこまれるのは迷惑だ、という気配が杉屋にははつきりあった。

「俺は、保田という者でね。臨時廻りだ」

「御要件は、御用の筋でございますか？」

「まあな」

「それはまた。奥で茶などを差しあげたいと思いますが」

気軽に新兵衛は頷き、導かれるまま奥へ通った。抽出の小さな簞笥が壁一面に並んでいて、菓草の匂いが強かった。部屋の間には、菓研が三つ並べて置いてある。

女中が、茶を運んできた。

「三次の親父のことだ、杉屋」

「はあ、芳蔵さんがなにか？」

「同心に一分銀を掴ませるつてのが、ちょっとひっかかってね」

「掴ませるなどと、とんでもございません。御挨拶ですよ」

「ここは、杉屋だ。一分銀一枚の挨拶でも、そんなものかと俺は思っただろう。きのうは、漁師のとつつあんひとりの挨拶だぜ」

「芳蔵さんは、手前どもにとっちゃ大事な人でございましてね。金竜丸を御存知でございますか？」

「元気がよくなるというやつだな。疲れを回復させるという」

「腎虚じんきょに効くという評判でございます。なんだかは申しあげられませんが、海で獲れるあるもの